

抄 録

結核専門雑誌

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose,

Bd. 73, H. 4, 1930.

1、肺結核患者ノ横隔膜神經及ヒ迷走神經ノ

病理組織學ニ就テ

W. Steflo.

著者ハ其ノ材料ヲ五六ノ手術例。一一ノ剖見例ヨリ仰ギ組織學的ノ檢索ヲ行ヒシニ前者ニ於テ一一例、後者ニ於テ六例ノ變化ヲ認メタリ、其ノ變化部位ハ前者ニ在リテハ下方 $\frac{1}{3}$ ノ高サマテ後者ハ $\frac{2}{3}$ ノ高サマテ存セリ。細葉性増殖性慢性肺結核ノ三剖見例テハ横隔膜神經ノ變化ハ次第ニ下方ヨリ上方ヘ向ヘルモノ、如ク下部ノ神經組織ハ悉ク結締組織ニ變化セルニモ拘ラズ上方ニハ尙ホ少數ノ神經組織ヲ殘ス、其ノ變化ハ外、内神經鞘炎ノ型ノ下ニ處々孤立シテ始マリ最後ニ髓鞘ヲ侵ス、其ノタメ神經纖維ハ破壊セラレテ次第ニ萎縮ヲ來ス。是等ノ變化ヲ急性傳染性疾患ニ於ケル迷走神經ノ變化ニ比較スルニ後者ニ在リテハ其ノ變化ハ最初髓質、シュワン氏鞘ニノミ限局セラレ神經包圍結締膜、外神經鞘ニハ變化ナク、唯慢性ニ移行シタル場合ニ於テノミ僅カニ外神經鞘ノ肥厚ヲ認ム、之ト稍々同似ノモノヲ慢性肺結核ニ際シテ迷走神經ニ證明ス。(池上抄)

2、肺疾患殊ニ結核ト循環器系統機能ノ強健度トノ關係

H. Poeping.

著者ハ心臟ノ代償機亡失ノ存セヌ肺疾患者一五〇名ニ就キ、循環器系統ノ機能ヲ試験シタ方法ハ Adlerschumpf ニ基キ安靜状態ニ置キタル患者ノ血壓ヲ計リ次テ Kniebeugen ヲ一〇回行ハシメ直後ヨリ五分間毎分ゴトニ血壓ヲ測定ス、是ニ、カウフマン氏ニヨル尿排泄試験ノ變法ヲ併用シタ、一五〇名中二三名ハ非結核性肺疾患二九名ハ開放性結核、九八名ハ閉鎖性肺結核テアル、全體ノ六八%ニ於テ循環器系統ノ能力減退ヲ證明ス。非結核性疾患ニ於テハ六〇・八%、閉鎖性結核ハ六四・三%、開放性結核ニ於テハ八六・二%、其ノ減退ヲ示ス。罹患ノ期間ノ長キ程、機轉ノ廣汎ナ程、其ノ障碍ハ大デアル、非結核性ノモノハ結核性ノモノニ比シテ侵サル、度合ハ少ナイガ長期存在スレバ免ル、ヲ得ナイ。此ノ兩試験ヲ用フル時ハ循環器ノ機能減退ヲ早期ニ發見スル事が出來ル、此ノ試ミニ於テ兩法ノ成績一致シタルハ六五・三%、不一致ノモノテハ Adlerschumpf 氏法ガ餘計陽性率が多い、從テ、血壓測定法ハ尿排泄試験ヨリモ速ニ機能減退ヲ知ルノニ役立つ。赤洗反應ハ此ノ兩試験ト何等ノ關係ハナイ。尙ホ著者ハ治療ノ事ニ言及シテキル。(池上抄)

3、「ツベルクリン」反應ノ研究

G. Platonoff. u. S. Schawrowa.

皮内注射ニヨリ反應ノ明瞭ニ現ハル、ツベルクリン量ヲ定メ、之ニ種々ノ藥物ヲ添加シテ其ノ消長ヲ檢討セリ。
Natr. morrauth. ハ既ニ〇・〇一%ノ濃度ニ於テ反應ヲ減弱セシメ濃度ヲ増ス

ニ從ヒ其ノ減弱度ハ増加ス、一%ヲ用ルル時ハ二四時間後ニ局所ニ膿泡ヲ作り赤色圈ヲ生ゼズ、直徑亦小ナリ、其ノ繼續ハ三、四日ナリ、之ニ反シテ、ツベルクリンノミニヨル對照ハ其ノ反應ガ一週間繼續ス、Natr. gynoecardヲ使用スルモ、此ノ關係ハ略々同一ナリ。「レチチン」ヲ用フル時ハ反應ハ對照ヨリモ強度ニ現ハル、又金屬鹽トシテ、「クローマンガン」、「クロールカルチウム」ヲ併用シタルニ第一ノ場合其ノ○・〇五「モル」溶液ニテ反應ハ減弱ス、又豫メ、ツベルクリン反應ヲ試ミオキ、其ノ後三%ノ「クロールカルチウム」ヲ靜脈内ニ注入シ再ビツベルクリン反應ヲ試ムルニ、二四時間後ノ所見ニハ變化ナキモ四八時間後ニ於テハ、其ノ反應度ハ對照ニ比シ甚ダ強度ナリ。ツベルクリンニヨリ惹起セラル、皮膚ノ局所反應ハ同時ニ肺ノ病竈反應ヲ伴フモノナルガ故以上ノ實驗竝ニモロー氏其他ノ先人ノ實驗等ニヨリ著者ハ肺ノ病竈反應ノ銳敏度ヲ減弱セシムル治療試驗ハ可能ナルモノト想像ス。

(池上抄)

4、結核ノ「ベンチノール」療法ニ就テ

Jonas Kairukshtis.

本劑ハ「ベンチン」ヲ「オレーフ」油ニ浮游セシメタルモノニテ之ヲ筋肉内ニ使用ス、強烈ナル病竈反應ヲ來サシムル故使用量ニ注意ス、著者ハ各病型、各病期ノ患者六二名ニ就キ、三乃至四ヶ月ニ互リテ三%、〇・一延ヲ三週間毎ニ用ヒテ良好ナル成績ヲ得タリ、四例ノ外科的結核ノ患者ニ於テモ成績甚ダ良好ナリシト言フ。

(池上抄)

5、人工的橫隔膜痙攣ノ肺上葉ニ孤立スル

結核機轉ニ及ボス影響

N. Oekonomopoulou.

抄 録

五二名ノ手術例ノ中、上葉ノミニ病竈ガアリ、手術後相當長期間觀察シタルモノ七例ニ就テ報告ス、手術直後ヨリ、其ノ側ノ呼吸音ハ全體トシテ甚ダ減弱スルモ、一五—三〇日ニシテ上葉上部及ビ橫隔膜ニ近キ肺野ヲ除テハ再ビ舊ノ強度ニ復シ、上葉上部ハX線像ニテ強キ陰影ヲ示ス、即チ病竈ノ萎縮ヲ認ム、著者ハ上葉上部ニ於ケル呼吸音ノ減弱ヲ Ossofs Fomet 氏ノ Kraftlinienheorie ヲ以テ説明シ、中部肺野ノ呼吸音ノ手術後再ビ舊ノ強度ニ復スル現象ノ説明ヲ肋骨運動ノ旺盛トナル原因ニ歸ス、七例共悉ク其ノ結果良好ナリシタメ著者ハオルゾス氏ノ理論ヲ正當ナルモノトセリ。浸潤ノ新鮮ナル程、又空洞壁ノ菲薄ナル程、手術ニヨル影響ハ良好ナリ、他方、效果ノ少ナキ場合ハ病竈ガ廣汎ニテ陳舊ナル程又、空洞ガ乾酪性肺炎竈ヲ以テ圍繞サル、場合ナリ。肺葉間肋膜ノ厚皮形成ハ上葉ノ退縮ニ障碍ヲ與ヘザルモ、上葉上部ノ肋膜癒著及ビ廣汎性ノ癒著アル場合ハ、其ノ效果少キカ或ハ全ク無効ナリ。

(池上抄)

6、赤沈反應ニ對スル煤煙ノ靜脈内注射ニ

ヨル影響ニ就テ

Marta Pilgram.

著者ハ Düsseldorf Kinderklinik ニ於テ一〇名ノ結核兒、一〇匹宛ノ健康家兎及ビ犬ニ於テ本實驗ヲ試ミタルニ何レノ例ニ於テモ赤沈速度ハ速ニナリタルヲ認ム。

(池上抄)

7、早期浸潤ニ關スル駁論ニ就テ

Franz Redeker.

著者等ニヨリテ提出サレタ早期浸潤ノ問題ニ對シテ多クノ學者ガ各々専門的ノ立場カラ論争ガ惹起サレタガ最近ノ業績ニ屬スル Haeger 及ビ Baden 氏

一一〇H

等ノ之ニ對スル反應意見ヲ紹介シテキル、(ヘーゲルハ、レントゲン)技術ノ原理的方面カラ本問題ヲ研究シテキル、(パーテンハ、シエーンベルグ)病院ニ於テ其處ニ藏セラレタル過去ノ一五〇枚ノ、レントゲン)寫眞ヲ通覽シテ新學說ヲ批判的ニ研究セリ。

(池上抄)

8、レデーケル氏ノ發表ニ對スル警告

K. Baden.

9、早期浸潤ニ關スル説明(レデーケル氏ノ論難ニ對スル反問)

G. Schröder.

10、肺絲狀菌病ノ一例報告

Rolf. Bergman u. Folke. Henschen.

咯血ヲ繰返ヘシ臨牀上ノ所見ガ結核ヲ思ハシムル例ニシテ喀痰内ニ結核菌ヲ證明セザル場合ハ稀ニ本病ニヨルニトガアリ得ルトノ警告テアル、今日マデニ報告セラレタ重要ナル文獻ニ就テ本病ノ發生、病理解剖的所見及ビ絲狀菌ノ毒性等ニ關シテ諸家ノ意見ヲ紹介シテ自己症例一例ヲ報ズ、夫レハ六一歳ノ婦人患者テ二〇年前前カラ次第二無氣力トナリ、頑固ナル咳嗽ニ惱ミ肉體勞動ニ從事スル時ハ心悸亢進、呼吸促進ヲ來ス、其ノ經過中屢々體溫上昇、咯血、血痰咯出ヲ繰返ス、一〇年來諸處ノ病院ヲ訪レ常ニ肺結核ノ診斷ノ下ニ其ノ治療ヲ受ク、胸部所見ハ、レントゲン)像ニヨルモ理學的臨牀檢査ニヨルモ殆ンド結核ノ夫レト異ル所見ヲ認メ得ズ、喀痰内ニ結核菌ヲ證明セズ、唯注意スベキハ、既ニ長期ニ互リ病竈ガ廣汎ニ存シタルニモ拘ラズ、其ノ後ノレントゲン)寫眞ハ前同様ニテ餘リ著シキ變化ヲ認メズ、經過ハ緩慢ニテ而モ仕事ニ從事スルコトヲ得タル點ナリ、剖見ニヨリ空洞ヨリ得タル内容ニハ多

クノ絲狀菌ヲ發見セリ、又他ニ結核竈等ヲ發見セザル事ヨリ、本例ハ原發性ノモノナルヲ知ル、病竈擴大ノ方法ハ周圍ニ向ツテ連續的ニ浸潤シ、轉移竈ヲ作ラズ、之ガ其ノ經過ガ緩慢ナリシ原因デアラウ。

(池上抄)

11、レントゲン線ヲ以テスル肺臟診察法ノ技術ニ關スル寄稿(レデーケル氏ノ前掲ノ發表ニ對スル返答)

E. Haeger.

Zeitschrift für Tuberkulose, Bd.55, H. 2, 1929.

12、結核問題ト結核相談所(Fursorgestelle)

Münchenノ結核相談所ノ一九二八年ニ於ケル所見報告

Gustav Baer u. B. Kattenidt

本論文ハ觀察總人員五九二例中開放性結核四〇七例、閉鎖性結核九三例ニ「レントゲン」像、初期浸潤、病理組織的所見、病竈ノ位置、崩壞傾向、肋膜炎ノ併發、經過、二次的結核ノ位置、肺ノ一次性結核ノ位置及ビ豫後、年齢、社會的地位、男女ノ別トノ關係等ニ關シテナセル詳細ナ統計的報告及ビ夫レ等ニ就テノ著者等ノ所見ヲノベタモノデアアル。

(佐々抄)

13、「レントゲン」像ニ於ケル奇葉

(Azygoslappen)

Dr. Margret Neumann.

著者ハ多數ノ「レントゲン」寫眞ヲ通覽シテ、其ノ中ノ四枚ヲ特殊ノ像ヲ見タ、夫レハ右ノ肺門部ノ上方第一肋間ニ於テ、上外方ニ向ツテオル、鳥嘴

狀ノ石灰沈著ヲ思ハスル程ニ濃厚ナモノデアアル、本像ハ葉間癥痕デモナク、又、肺炎萎縮ヲ發生シタモノデモナイデ、剖檢ニ際シテモ確カメラレタコトガアルヤウニ、全ク奇靜脈ノ異常經過ガカ、ル像ヲ示スモノデアアル、本像ニ就テハ最近「レントゲン」専門家ノ文獻デモ著者等ト無關係ニ發表セラレタガ、コレハ單ニ「レントゲン」専門家ニ興味ヲ與フルバカリデナク、呼吸器病専門醫ニモ、鑑別診斷の價値ガアル。何トナレバ本像ハ肺實質又ハ肋膜ノ特殊變化ニ起因スルモノテナクシテ、組織ノ病理的變化ヲ伴ハナイ、單ノ解剖的異常ガ示スモノデアアルカラデアアル。(佐々抄)

14、結核ニ對スル鼠ノ免疫機轉ニ關スル問題ノ知見補遺

T. Goldenberg.

結核ニ對シテ鼠ノ比較的強イ免疫ガ、何ニ起因スルカニ就テノ説明ハ今日尙一定シテオラス、アル學者ハ體液の方面カラ説明シテオリ、他ノ學者ハ細胞の方面カラ解決ヲツケヤウトシテキル。著者ノ本研究モ全ク、其ノ問題ノ解決ヲ目的トシタモノデアアル、其ノ目的テ著者ハ老幼種々ノ鼠ヲ用ヒ、又感染菌量ヲ色々トシテ實驗シテキル、其ノ成績ハ次ノ結論ノ通りデアアル。

(一)鼠ハ比較高度ノ免疫ヲ結核ニ對シテ、有シテハキルガ、實驗的結核感染ノ後ニ肉眼的ニモ肺内ニ結節變化ヲ認ムルコトガ出來ル、但シ其ノ病變ノ強度ハ、感染菌量、感染手段、菌株ノ如何及ビ鼠ノ老幼ニヨツテ相異ガアル。
(二)鼠ノ結核ハ其ノ經過ガ特有デアアル、又組織學的ニ見ラレル結節變化ハ、特有ノ結節性造構ヲ示サナイ。

(三)鼠ノ結核ニ對スル免疫ハ、他動物ト同様ニ明ラカニ、細胞性性質ヲ有シテキル。

(四)「アドレナリン」皮下注射又ハ「トリパン」青ニヨル網狀内被細胞組織系ノ「ブロックアテン」(Blockaden)ハ鼠ノ結核ニ對スル抵抗力ヲ多少減弱セシムル。
(五)「ヴェキタミシ」缺乏ハ鼠ノ結核ニ對スル抵抗力ヲ減弱サスル一ツノ因子デアアルコトガ分ル。
(六)結核ニ感染シテ尙肺内ニ結節變化ヲ有シテキル鼠デモ、「ツベルクリン」ニハ反應シナイ。(佐々抄)

15、活動性結核ニ於ケル H. Schlosberger 氏ノ沈降反應 (Praecipitationsreaktion) 及ド夫ト他ノ血清ニヨル検査方法トノ比較

H. Schulte-Tigges.

血清蛋白ノ沈降作用ヲ結核ノ診斷ニ應用シタ方法ハ多々提唱セラレテキルガ、何レモ充分ノ目的ヲ達シ得ナイモノバカリデアアル、H. Schlosberger モ最近新シク沈降反應ヲ應用シタ診斷法ヲ發表シタ、Mecklenburg u. Dau ハ四三例ノ患者テ追試ヲ行ツテ、臨牀的價値大ナリトシ、且ツ、Mately 反應ナドノヤウニ、アマリニ敏感デナイノガ反ツテ得點デアツテ、特ニ初期診斷ニ應用シテ效アルト云フテキル、尙本反應ハ結核ノ治癒ニ伴ツテ其ノ陽性度ガ減弱スルガ、重症ノ滲出型ノ血清テハ反應ガ却ツテ輕度ダトセラレテキル。

著者ハ Rheinland ノ療養所テ三〇〇例ニ就テコレヲ追試シタ、尙 Goldenberg 反應、Besredka ノ原法及ビ赤血球沈降反應モ同時ニ施行シテ其ノ成績ヲ比較シテ見タ、其ノ結果次ノヤウニ云ツテキル(一) Schlosberger ノ沈降反應ハ補體結合反應ト同様ニ肺結核ノ臨牀的所見ト一致スルコトガ少ナイ、尙補

體結合反應ホドシバ、デハナイガ本反應ハマレナラズ結核ノ真性型ニ陽性ヲ示ス。尙重症型テハ度々陰性成績ヲ示ス、一ノ點赤沈反應ト相似タルモノデアル。(二)故ニ臨牀上ノ價値ハサホド大ナモノデハナイ、赤沈反應ト補體結合反應トノ併用試験ノ方ガハルカニ勝ツテキル。

(本試験方法ヲ略記スルト次ノ通りデアル、二珪ノ血清ヲ水浴テ五十六度三十分テ非働性トシ、三%ノ食鹽水〇・八珪ヲ加フ、更ニ「A」ト名ヅケタアンチフォルミン、エッキストラクト」ヲ三滴ト、「B」ト云ハル、一%ノ「レチチン」ノ酒精溶液(コレハ使用ニ先ダチ三%ノ食鹽水テ、六倍ニ稀釋スル、コノ時「レチチン」液ニ食鹽水ヲ加フルトイケナイ)。一珪ヲ追加スル、コノ混合液ヲ試験管デヨクマヤテ、「フラン」器室内ニ二四時間―四八時間オイト、沈降ノ有様ヲ檢スルノデアル、少ナクトモ二四時後テナイト反應ハ現ハレズ、九六時間後ニハジメテ現ハル、コトモアル。(佐々抄)

16、結核豫防上ヨリシテノ英國ノ

牛乳法則ノ規定

H. Haupt in Leipzig.

著者ハ英國ノ牛乳法則ニ就テ詳細ナ記述ヲシテ、コレト獨逸テ選定中ノ牛乳法則ヲ比較シテ、英國ノ法則ノ方ガ其ノ言葉ノ意義ガ解釋自由デ且ツ廣義デアルカラ飲料牛乳ノ消毒等ニ關スル法則ヲ作ル時ニハ充分考慮ヲ要スルト云フテキル。(佐々抄)

17、Neuen Heilanstalt Schömberg bei Wildbad

ノ一九二八年度ノ報告並ビニ肺結核ノ

外科的療法ニ就テノ二三ノ意見

R. Brinkmann.

本論文ハ表記ノ肺結核治療所ノ一九二八年度ノ治療成績ニモトヅイテ、(一)肺炎疾患特ニコレガ閉鎖性デアル時ハ治療ヲ必要トシナイ。(二)凡テノ初期浸潤ニハ人工氣胸術ヲ施行ス。ナル二點ニ就テノ著者ノ意見ヲノベタモノデアル。前者ニ對シテハ閉鎖性肺炎病竈ヲ有スル例テ、喉頭結核ガ併發スルヲ、外來性ノ重感染テ、肺炎病竈カラ轉移シタモノテナイト云フ説モアルガ、ソレハ假設テ證明ハナイ、Recknerモ肺炎病竈ハ外來性重感染ト云フ説ヲタテ、キルガ、肺臟外ノ病竈ニ就テハ何等言及シテオラス、コレ等カラシテモ、閉鎖性肺炎病竈ヲ無害ナルモノトナス考ヘハ誤謬デアルトシタイト云ツテキル。後者ニ關シテハ初期浸潤ハ隨分自然治愈シウルカラシテ凡テノ場合人工氣胸ハ必要トシナイ、治愈ノ傾向ガナク、崩壞ノウタガヒアル時ニハ直ニ考慮セラルベキモノデアリトスル。

又コノ外横隔膜神經捻除、胸廓成形術、癒著索灼除法等ニ就テノ適應及ビ實驗成績ヲノベテ、最後ニ吾々が積極的ニ行フ治療法モ要スルニ生體ノ有スル自然治愈機轉ヲ補助スルニ過ギナイモノデアルコトヲ忘レテハナラヌト云ツテキル。(佐々抄)

The American Review of Tuberculosis, Vol.

XXI, No. 4, 1930.

18、乳兒ニ於ケル結核感染ニ就テ

T. A. Myers and L. M. Kernkamp.

大部分ハ Lymanhurst Out-Patient Department ニ於テ且テ實驗セラレタルモノナレドモ、二歳及ビ其以下ノ乳兒五三三例ニ就テ「ツベルクリン」皮膚反應ヲ行ヒシニ、二九六例丈ケ陰性ニシテ(第一回試験ニ於テ)全兒中二三

三例ハ結核菌ニ曝露セラレシモノナリ、然シテ此二三六例ノ「ツベルクリン」陽性兒ノ中比較的少數ノミガ後ニ臨床的結核ヲ發セシノミナリキ、然シテ其二三六例中結核菌ニ曝露セラレシ既往ヲ有スル者一九六例ニシテ凝ハシキモノ二例ナリキト。

其他此二三六例ニ就テX線試驗及ビ理學的診斷ヲ行ヒシニ一八〇例ノ陰性四二例ノ陽性ヲ發見セリ一年乃至八、九年後ノ現在死亡セルモノ一〇例ナリ、他ノ大部分ハ健在セリ、次ニX線試驗ニ於テ肺門部陰影ヲミトムルモノ二六例、肺臓内ニ認ムルモノ八例、骨及ビ關節ニ疾患ヲ認ムルモノ五例ニ就テ現在ノ狀態等及ビ結核曝露ノ有無ヲ比較セリ、然シテ曝露ト感染ニ就テ多クノ學者ノ說ヲ述ベタリ、然シテ最後ニ自分ハ結核感染ノ豫防ノ第一歩ハ結核菌ニ對スル曝露ヲサケシムルニアリト信ズト。

19、小兒期ニ於ケル結核感染ニ就テ

J. A. Myers.

著者ハ Pirquet, Mantoux, Hamburger, Monti Lovett, Moro-Doganaff, 氏等ノ「ツベルクリン」反應試驗ノ比較ヲ表ニ示セリ又之ニ對スル諸氏ノ說ヲ述ベ又小學兒童ニ就テノ諸氏ノ實驗成績ヲアゲ之ニ加フルニ Lymanhurst Schoolニ於ケル六〇〇〇名ノ男女兒童ニ就テ Pirquet 氏試驗ト結核菌曝露者トノ關係ヲ表示セリ。

(太田抄)

20、十歲代ニ於ケル少年少女ノ結核ニ就テ

J. A. Myers and L. M. Kernkamp.

著者ハ十歲ヨリ二一歲迄ノ少年及ビ少女ノ結核ニ就テ何等カ目立チシ事實ヲ發見シ得ルヤ否ヤノ考ノ下ニ結核ノ診斷ヲ確定シ得ル症候ヲ有スル者ニ就テ研究セリ、Lymanhurst Out-patient Departmentニ於テ六四例ヲ得、之等ノ

者ノ年齡ノ平均ハ一三・四五ナリ、次ニ其上ノ年齡ノモノトシテ平均一八・四五歳ノモノ一七八例、即チ全數二四二例ナリ、其中男子ハ幼年者中四一女子ハ二三例ナリ、若年者ニテハ一三一例女子、四七例ハ男子ナリ。

然シテ兩組中結核ニ曝露セシ既應アルモノ幼年者ト若年者ノ比ヲ視ルニ幼年者四四例、若年者二九六例アリ、次ニ肋膜炎ハ五例ニ對シ八三例アリ。死亡者ハ三例ニ對シ四四例アリ、嗜血者ハ一例ト三七例ナリ、又兩組ニテ著シク進行セルモノ幼年者ニハ二例、若年ニハ八二例、中等度進行セルハ一一例ニ對シ四五例ナリ、次ニ之ヲ大體小兒型、小兒成年ノ混合型、大體成年型、石灰沈著トニ分チテ兩組ヲ比較セリ、然シテ小兒型ハ前者ニ多ク混合型ハ後者ニ多シ石灰沈著與フルモ混合型ニ等シト、然シテ壓縮療法トシテ人工氣胸及造胸術ヲナスニ之ヲ又輕度中等度進行者ノ三種ニ分チテソノ可能不可能及ビ結果ノ良否ヲ表示セリ、次ニ死亡率ニ就テモ表示セリ。

(太田抄)

21、成年者ニ於ケル結核感染

H. D. Lees and J. A. Myers.

ミネリタ大學新人學生ニ「ツベルクリン」試驗ヲ行ヒテ之ヲ統計的ニ觀察セリ例數二・〇九三例。

之ヲA—E迄ノ五階級ニ分チAハ人口五〇〇〇〇以上ノ都市ヨリ來リシ者Bヲ五・〇〇〇—一五・〇〇〇Dヲ一・〇〇〇—五・〇〇〇Dヲ五〇〇—一・〇〇〇Eヲ五〇名以下ノ町ノ出身者トセリ。

次ニ性トコノ階級ニヨリテ及ビ年齡ト階級ニ就テ各研究セリ出身都市ニヨルA—E迄五階級ノ間ニテハ「ツベルクリン」試驗ノ陽性率ハ大差ナシ、其他男性ニテハ三六・二%、女性ハ二九・八%ノ陽性率ヲ示セリ、又男女兩性ニテモ

A—E五階級間ニテハ大差ヲ見ズ、尙之ニ就テ Krause ノ説ヲ述ベタリ。
(太田抄)

22、老年者結核ノ意義

J. A. Myers and H. R. Anderson

各年齢ノ結核ノ統計が如何ニ誤リ多キカラ述ベ殊ニ老年者ニ於テハ其症狀が極メテ軽度ナルモノ多キ爲メ見誤ル事多シト之ニ就テ Krause, Calmett 等ノ説ヲ述ベ、然シテ開放性結核三七例ノ男女、年齢ハ五〇—八〇歳ニ達スルモノニ就テ報告セリ其内九例ハ彼等ノ若年時家庭ニテ結核曝露中ニアリシモノナリト又彼等ノ子及ビ孫中ニテ一三名ノ患者ヲ出セリ然シテ子孫ニ就テハ少数シカ實驗シ得ザリキト、又老年者ノ結核ハ吾人が之ヲ診得ル迄ニ早クモ六週間遅キハ凡ソ四五年ノ永キニ渉レルアリ然モ六例ハ最初咯血ニテ五例ハ全經過中全ク咯血ヲ見ズト、又肋膜炎ノ症狀ヨリ初マリシモノ六例、感冒氣管枝炎咳嗽等ヨリ初マリシモノ二〇例ナリ、結核菌ハ二一例ニ陽性然モカ、ル停止性患者ニ於テハ一同ノ検査ノ陰性ハ全ク無意義ナリ皮内反應ハ非常ニ價値多シX線検査ニ至リテハ之ナクバ全ク診断シ得ザルモノナリ又治療上ヨリモ若年ノ如ク體温上昇等ニ就テモ餘リ保守主義ヲ嚴守スル要ナシ然シテ症狀が少シク進行性ニ傾キシ時人工氣胸術ヲ行フ可キナリ、然モ老年者結核ハ豫防學上重要ナル問題一ナリト結論セリ。
(太田抄)

23、肺結核ノ潜伏性及ビ急性開始ノ

危険ニ就テ

J. A. Myers.

著者ハ症候不明ナル患者一〇例程ヲ記載シソノ症狀及ビ經過ヲ各々ニ就テ記載シ之等ガ後ニ皆明確ナル結核ヲ發センヲツゲタリ、著者曰クカカルガ故ニ

スベテノ國民ヲ常ニX線ニヨリテ検査シ早期ニ發見シ之ニヨリテ治療ヲ施スヨリ他ニ方法ナシトセリ然シ之ハ實際問題トシテ行ヒ得ズ又經濟上ヨリモ行ヒ得ズ、故ニ National Tuberculosis Association ノ努力ニテ吾國ノ小兒期兒童ノ注意深キ研究ニヨリテナシ得ヘシト然モ之ノ小兒ノ症狀ノ研究ハ最モ意義アル方法ナラント思ハルト。
(太田抄)

24、老年者ニ於ケル肺結核

A. L. Banyai

著者ハ合衆國統計局ニテ一九二六年ニ人口一〇〇〇〇〇ニ對スル肺結核ノ老年者ノ死亡率ヲアゲ之ニコレバ一般ニ若年ヨリモ老年者ニ結核死亡者少キ如ク見ユレドモ、之ノ統計表ヨリ見ル時ハ反對ニシテ人口一〇〇〇〇〇ニテ七六・四ヲ即チ老年者ニ於テ相當多キ部分ヲシメラレタルヲ見ル。

Muerdale Sanatorium ニテ總テノ患者ノ七・二%ハ五〇年以上ナリト云ビ之等ヲ各年齢ニ就テ死亡率及ビ病勢病期等ニ就テ統計ヲ作レリ然シテ肺結核ハ老年者ニ於テ決シテ少数ナラズ、又理學的診斷ニテ其キ症候及ビ自覺的ニ良好ナルカ體温ノ平熱等ノ事ハ決シテ肺結核ヲ否定シ得可キ證ニアラズト、又肺出血モカ、ル老年者ニハ稀ナラズ、四三・五%ニ咯血ヲ見ル、X線検査ハ又鑑別診斷上缺ク可ラザルモノナリ、纖維性ノモノ最モ多ク合スレドモ滲出性ノモノモ尠カラズ、合併症トシテハ特發性氣胸、結核性喉頭炎、腎臟結核、筋肉炎、糖尿病等ナリ。
(太田抄)

25、肺結核ニ於ケル特發性間質性氣腫

R. Meade F. Stafford.

肺結核經過中ニ發セン特發性間質性氣腫ノ一例ヲ報告セリ三十歳ノ白色婦人ニシテ多數ノ切開手術ニヨリテ幸ニ治癒セリト。
(太田抄)

26、實驗的結核ニ海狸ノ塞内丸ニ生ズ

ル結締組織ノ起原

George A. Baisell and Karl E. Mason

(一)海狸ノ辜丸組織ヘノ結核菌ノ感染ハ急速ニ起リ且ツ精細管ノ芽細胞ノ變性變化ガ來ル、コノ變化ハ對照動物ニ於ケルヨリ再感染動物ノ辜丸デハヨリ早期ニ起ツテ來ル、芽細胞變性ハコレガ辜丸カラ消失スル事デ、精細管カラ芽細胞ガ消失スルノハ、精細管ノ内徑ガ小トナリ同時ニ夫レニ相當シテ細管間域ガ擴大スルノデ分ル。

(二)感染部位全般ニ互ツテ擴大シタ細管間域ニ多量ノ滲出物が迅速ニ發生スル事ハ(感染後間モナク起リ來ルモノデアアル)辜丸組織中ニ起ル組織學的變化ヲ將來スルモノデアアル。感染部位ニ發生シタ滲出物ヲ検査スルニ顯微鏡的デハ比較的均一性ヲ示シテキテ、恰モ凝固血漿ノ染色標本ヲ見ルヤウデアアル。

(三)纖維組織ノ形成ハ細管間域ニ於ケル滲出物質ガ直接變化ヲ爲スヤウデアアル、此ノ變化ノ第一段ハ纖維細纖維トシテ現ハレル、過程ガ進メバ定型の網狀造構ヲ示ス、變化ガ其ノ極ニ達スレバ纖維ハ波狀ヲ呈シタ大キナ束ヲ作ル、而シテ丁度膠樣纖維ニ似タ外形ヲトリ、夫レノ特有ノ色彩ヲ帶ブル、コレハヤガテ結核結節内ニ、又感染部位全體ニ浸潤スルニ至ル、コレ等纖維組織形成ハ現今知ラレタ範圍内テハ、滲出物質中ニ存スル微小纖維ノ融合及ビ凝固ニ起原スルト思ハレテキル。

(四)結核結節ノ發生ハ結核菌感染組織ニ特有デアツテ、辜丸ノ感染部位ニ

於テ擴大シタ細管間域内ニ於ケル滲出物質ノ形成、細胞浸潤及ビ纖維組織ノ發生ニ伴ツテ見ラレル、結節發生ニ關スル細胞學的ノ研究ハ今日尙充分ニ遂ゲラレテ居ラス。(佐々抄)

27、肝油ト「トマト」汁トヲ以テスル

腸結核ノ治療

M. Mc Conkey

肝油ハ「ラビチス」ニ對シテハ人工太陽燈ト同一ノ治療的效果ガアリ、腸結核ハ「カルチウム」代謝ト關係ガアルト云フ點カラ著者ハ、肝油ヲ腸結核ノ治療ニ用ヒタ、シカシ其ノ不快ナ味ノタメニ豫期ノ結果ヲ納メ得ナカツタ、タマ「オレンヂ」汁ニ肝油ヲ浮カシテ用ユレバ其ノ味ヲ善クシ且ツ效果ノ著明ナ例ヲ見テ、「レモン」ト同様ノ效果ガ考ヘラレ且ツ安心ナ「トマト」ヲ代用スル事ヲ考案シテ五〇例ノ腸結核患者ヲ治療シタ、其ノ成績ト二十八例ノ何等特殊療法ヲ行ハナカツタ例ノ成績ト、人工太陽燈ヲ治療シタ五〇例ノ成績トヲ比較シテ次ノヤウニ云ツテキル。

(一)普通ノ病院食餌ニ「トマト」汁ト汗油トヲ追加スル事ハ肺結核ヲ合併シテキル腸結核ニハ最も適應シタ療法デアアル。(二)使用方法ハ簡單デ、經濟的デ而モ何等ノ禁忌ガナイ。(三)少ナクトモ人工太陽燈ニ比敵スルダケノ效果ガ見ラレル。(四)放射治療患者デ家庭ニアルタメ再後其ノ治療ガ繼續シ得ナイ場合等ニハ最も必要ナ治療方法デアアル。(五)本療法ハ又多數ノ場合腸結核ノ豫防ノ意味デモ試ミラルベキモノデアアル。(六)開放性結核患者デ腹結核ガ證明サレタ例又ハ其ノ疑ヒヲ有スル例デハ夫レガ高度ノ變化ヲ來サナイ内ニ本治療法ハ必ず應用セララルベキデアアル。(佐々抄)

28、喉頭結核ノ三鹽化醋酸療法

Benjamin Katz

本論文ハ實驗報告テハ無ク、本療法ニ關スル一般の記述デ、先人ノ所説ニ自己ノ意見ヲノベタテノテアル、而シテ最後ニ本療法ニ就テハ左ノ事項ハ力言シ得ルト云ツテキル。(一)本療法ハ既ハ二十年來多數ノ人ニヨツテ實地ニ施行セラレテキルモノデ、不快ナル酸ノ副作用ヲ經驗シタ人ハナイ。(二)技術ハ平易テ而モ殆ンド時間ヲ要セナイ。唯其效果ヲ望ムニハ病竈ニ本酸ヲ用ユルコトガ正確ニ行ハレチバナラス。(三)潰瘍又ハ浮腫ニヨル嚥下困難ナドハ二三回ノ使用テコレヲ除ク事が出來ル。(佐々抄)

29、人工氣胸ニ隨伴スル肋膜滲出液發生豫防トシテノ鹽化「カルシウム」ノ效果

Louis Boonshart

人工氣胸時ニ肋膜滲出液ノ見ラレル頻度ハ報告ニヨツテ非常ナ相違ガアリ、甚シキハ七〇%テコレが見ラレルト云フ人ガアル。著者自身ノ經驗テハ四七%トナツテキル、扱テ其ノ原因ニ就テモ尙各學者ノ意見ガ必ズシモ一致シテキナイ從ツテ其ノ豫防方法モ確定シタモノガ無イ。著者ハ鹽化「カルシウム」ハ其ノ豫防的效果ガアルモノト信ジテ從來ノ其レニ關スル報告ヲ抄録シテ次ノヤウニ結論シテキル。(一)鹽化「カルシウム」ハ殆ンド凡テノ人工氣胸例テ其ノ隨伴症狀タル肋膜滲出液ノ出現ヲ豫防シ得ル。(二)滲出液ガ已ニ發生シタ時ニハ、夫レノ吸收ヲ促進スルカラシテ肋膜穿刺ノ回数ヲ少ナクスル事が出來ル。(佐々抄)

30、氣管枝性喘息ト肺結核

Joseph Harkavy and Selian Bebbald

氣管枝性喘息ト肺結核トノ關係ニ就テハ今日尙議論ガアル、例ヘバ Soccaノ如キハ結核ハ喘息發作ニ對シ直接ノ原因ノ關係ガアルト云フ、或ル一派ノ學ハ夫レ程ノ密接ノ關係ハ認メナイガ、結締織増殖、橫隔膜癒著、葉間肋膜肥厚及ビ肺門淋巴腺ハ喘息發作ニ重要ナ關係ガアルトスル、コレ等ニ反シ他ノ一派ハ喘息患者ニ肺結核ガ合併シテキルコトハ稀レダカラ、兩者間ノ原因的關係ノ存在ハ疑ハシイト云フテキル。尙各學者ニヨツテ本問題ハ種々論セラレテ全ク一致シタ意見ハ發見セラレナイ、著者ガ本問題ニ興味ヲ覺ヘタノモ全ク其ノ故デアアル。著者ハ先ヅ四百例ノ喘息患者ノ病歴ヲ檢査シタ、其ノ中臨床上及ビ「レントゲン」テ肺結核ガ證明セラレタモノハ四十例即チ一〇%デアツタ。尙著者ハコノ中數例テハ血清學的ノ反應關係ヲ檢査シタ、三四年間ニ互ツテ經過症狀ヲ觀察シタ、又他疾患特ニ感冒、著臍症等トノ關係モ觀察シタ、而シテ過敏性例テモ非過敏性例テモ、肺結核トハ密接ノ關係ハ認メ得ナイト云フ結果ニ達シテキル。(佐々抄)

31、結核性疾患類似ノ「ツバークラウ

ス」中ノ「フォカールインフエクシ

オン」(Focal Infections)

James Clute Bryant

齒科領域ニ關スル本疾患ニ就テノ記述ナリ。(佐々抄)

32、「ラッセル」ニ及ボス體位ノ影響

J. E. K. Flanagan

肺結核ノ診斷ニハ「レントゲン」ガ最モ大ナル役目ヲ爲スニ至ツタ今日テモ尙「ラッセル」ヲ聽取スル事ハ最モ意味ノアルモノデアアル、但シ病竈ガ存スルニ不拘コレヲ聽取シ得ナイ場合ガ少ナクナイ、カ、ル例テハ患者ノ體位ヲ色々

ト變ヘテ聽診スレバ「ラッセル」が聞ユル事ガアルト云フ學者ガ少ナクナイ、著者モコノ點ニ就テ實驗シテ次ノヤウナ結論ヲ得テキル。(一)二回ノ検査「ラッセル」ヲ聽取シ得ナイ時ニハ、コレヲ發見スルタメニハ尙數回ノ反覆検査ガ必要ナル。(二)普通ノ體位デ「ラッセル」ガ聽取サレナイ場合ニ、コレヲ發見スル目的ニ體位ヲ變ズルト云フコトハ餘リ價値ガ無イヤウデアアル。(三)「ラッセル」ヲ種々ノ方法ニヨツテモ聽取シ得ナイハ例デ、沃度加里ヲ與フル方法ヲ行ツタガ、「ラッセル」ガ現ハレタノハ一例デアツタ、コノ藥ノ投與ハ不快ノ症狀ヲ起スコトガ多イ。(佐々抄)

33、治療中ノ患者ニ及ボス感冒ノ影響

Fred H. Heise

著者ハ多數例ノ觀察ニヨツテ、「インフルエンザ」ハ必ズシモ原病ヲ再發又ハ増悪セシメナイガ、若シ感冒ニ侵サレタ時ニハ早期ニ臥牀ヲ命ズルガヨイ。若シ看護人が感冒ニ侵サレタラバ直ニ休養ヲトラセ子バ、患者カラ患者ヘト感染セシムル怖レガアル。喀痰ガ多イ患者デハ感冒ノ惡影響ヲ蒙ルコトガ多イ。太陽燈ハ感冒ノ豫防ニハ何等ノ效果ガナイ云々ト言ツテ居ル。(佐々抄)

34、「ツベルクリン」皮膚反應度ノ減弱ノ原因ノ

「ツットシテノ皮膚血液循環障礙

J. D. Pilcher.

著者ハ多數ノ患者ニ就テ實驗的研究ヲ遂ゲテ詳細ナ報告ヲシテキル、今其ノ結論バカリヲ抄スルト次ノヤウデアアル。人類デハ病勢ガ進ンテ體重ノ減少ヲ來スニツレテ、「ツベルクリン」敏感度ノ減弱が見ラレル、甚シイ場合ニハ一〇庭ノ「ツベルクリン」ニサヘ反應シナイ例ガアル、カ、ル反應ノ減退ハ皮膚

及ビ皮下組織ノ血液循環ガニブクナツテキルコトモ、タシカニ其ノ原因ノ一ツト思惟シウルモノデアアル。(佐々抄)

35、コスタ氏反應

Henry S. Penn.

コスタ氏反應ハ非特異性デアアルコトハ、他ノ結核ノ血清學的診斷法ト同一デアルガ、其ノ操作ガ簡單デ、且ツ短時間内ニ結果ヲ知ルコトガ出來ル、ノミナラズ割合ニ診斷の價値ガ大デアルト云ハレテキル、故ニ著者ハ一三〇例ニ就テコレヲ追試シテ、主トシテ活動性ノ程度判定上ノ價値ヲ觀察シタ、シカルニ其ノ結果ハ本反應ハ結核ノ活動性程度ノ判定ニハ參考トナリ得ナイト云フコトニ到達シタ。(佐々抄)

36、小兒ノ閉鎖性結核

Vladimir Mikulowski.

著者ハサキニ小兒ノ閉鎖性結核例デ、其ノ糞便用カラ結核菌ヲ證明シ得タ數例ヲ報告シタ、コノ糞便中ノ菌ハ膽汁中ニ存スルモノニ由來スルトノ説ガアル、著者ガ最近經驗シタ三歳ノ患者ハ、淋巴腺結核、「スピナベントーザ」以外ニハ肺ニモ、内臓ニモ結核變化ガ剖見ニテモ發見セラレナカツタガ、其ノ膽汁及ビ糞便中カラハ同様ニ結核菌ノ培養ニ成功シタ、故ニカ、ル例ノ糞便中ノ菌ガ膽汁中ニ存スルモノニ由來スルト云フ説ハ證明出來タ次第デアアル、尙著者ハ閉鎖性結核ト云フ定義ニ不徹底ナ點ガアルコト、又、小兒バカリデナク、成人デモ夫レノ診斷ガ困難ナルコト多イ點ニ就テ所説ヲノベテキル。(佐々抄)

37、結核患者ノ療養所退院後ノ狀態ニ就テ

Jessamine S. Whitney and Beatrice A. Myers.

本文ハ二ヶ所ノ州立療養所ノ退院患者凡ソ七千例ノ爾後ノ状態ヲ、約十七年間ニ亘ツテ、死亡、現在状態ヲ、年齢、性、人種、職業、在院期間、病勢等ノ各方面カラ分類觀察シテ詳細ナ統計的報告デアル。(佐々抄)

38、結核撲滅ノ對策

H. E. Kleinschmidt.

著者ハ本題ヲ、(A)結核菌傳播ノ豫防、(B)感染者ノ發病豫防、(C)感染ノ豫防及ビ抵抗力増進、(D)結核患者ノ治療問題ノ諸項ニ分ケテ、又各項ヲ更ニ細項ニ分ケテ詳細ナ論述ヲシテキル。(佐々抄)

結核専門外雜誌

39、肺炎並ニ肋膜炎ノ初期發生機轉ニ就テ

肺結核ノ病理機轉ニ關スル實驗的研究

第一編

平田實(長崎醫學會雜誌第八卷第三號)

家兎及ビ海猿ヲ使用シテ、塵埃吸入、結核菌注入ヲ試ミ因ツテ起ル處ノ肺炎ノ部位、異物附著ノ部位ヲ定メ肺結核ノ病理機轉ヲ明カニセントセリ。其ノ實驗ノ結果ニヨレバ、無菌性鋸屑塵埃ヲ吸入シタル場合ハ氣管枝加答兒、時トシテ肋膜炎ヲ發生ス。鋸屑ヲ吸入シタル場合ハ最初小氣管枝迄ノ炎症ヲ起シ次テ細小氣管枝、呼吸性細氣管枝及ビ氣胞道ト順次深部ノ氣道ニ炎症ヲ起シ、最後ニ肺炎ヲ起スモノナリ。結核菌注入ノ場合モ亦肺炎ヲ見ルモノナルモ、コレハ結核菌ガ最初附著シタル部位ニ炎症ヲ起シ、コレガ次第二周圍肺組織ニ蔓延シテ發生スルモノニシテ鋸屑塵埃吸入ノ場合ト趣ヲ異ニス。

鋸屑吸入ノ場合肋膜炎ヲ起スハ吸引鋸屑ノタメニ起リシ肺炎病竈ガ肋膜ノ直下又ハ肋膜ニ近接シテ存スル時ニノミ起ルモノニシテ、直接刺戟ニヨルモノニアラズ。結核菌注入後十四日以内ニ於テハ廣泛ナル肋膜炎ヲ見ルコト甚稀ニシテ、唯ソノ一部ニ結核性浸潤ヲ見ル程度ナリ。コレハ鋸屑吸入ノ場合ノ如ク肺組織ノ病竈ヨリ波及セルモノニ非ズシテ、結核菌ガ血行又ハ淋巴道ヨリ直接其部ニ到達シテ起リシモノナルベシ、コレ鋸屑吸入ノ場合ノ如ク其ノ附近ノ肺組織ニ甚シキ變化ヲ呈セザレバナリ。(伊藤抄)

40、炭水吸入ト肺結核トノ關係

肺結核病理機轉ノ實驗的研究第三編

平田實(長崎醫學會雜誌第八卷第三號)

炭肺ガ肺結核ニ及ボス影響ヲ實驗的ニ考察セリ、即チ海猿ヲ用ヒテ、之ニ炭粉吸入、及結核菌氣管內注入ヲ併行シテソノ結果ヲ見タルニ、動物試驗ニ於テハ、肺結核ノ發生以前ニ於テ長期炭末ヲ吸入スルコトハ一時的ニ該肺結核ノ進行ヲ或程度迄阻害シ、ソノ蔓延ヲ遷延ヤシメ得ルモノナルモ、肺結核感染後ニ炭末ヲ吸入スルコトハ其ノ病勢ヲ進行ヲ助長シ、却ツテ有害ナルモノナリト。(伊藤抄)

41、肺結核ト妊娠

Mario Mosco. (Zentralblatt für die gesamte

Tuberkuloseforschung. Bd. 32, H. 9/10.)

Zentralblatt) 結核相談所ニ於テナセル研究ナリ、結核妊娠ノ妊娠中絶ハ肺ノ病狀ガ明カニ増悪シ患者ノ病苦加ハリタル時ニ始メテナシ、然ラザル時ハ人工氣胸法ヲ行フ可キモノナリ、カ、ル方針ニヨリ多クノ場合結核妊娠ヲシテ病

狀ヲ増悪セシムル事無ク分娩ヲ行ハシムル事ヲ得タリ。

(春木抄)

42、泌尿生殖器ニ於ケル結核

Jgnac Farkas

(Zentralblatt für die gesamte Tuberkuloseforschung,

Bd. 33, H. 3/5.)

泌尿生殖器結核ハ肺結核ノ後ニ屢々來リ、最モ多クハ二〇乃至四〇歳ニ二次的疾患トシテ現ハル、最モ屢々淋巴腺結核ヨリ血流ニヨリテ腎臟或ビハ副峯丸ヲ侵ス、腎臟結核ハ急性粟粒結核ノ結果トシテ來リ或ビハ慢性ニ來ル、後者ノ場合ニハ(一)乾酪性腎臟結核、(二)腎乳頭ノ潰爛、(三)慢性散發性結核ノ型トシテ現ル。其後ハ主トシテ下降的蔓延ヲナシテ同時ニ他側腎ヲ侵ス。

未ダ膀胱ヲ侵サレザル中ニ早期腎摘出ヲ行ヘバ治癒完全ナリ姑息的療法ニヨレバ患者ノ八〇%ハ五年以内ニ死亡ス、泌尿生殖器結核ノ七%ハ後ニ腦膜炎ヲ併發ス。

腎臟結核ノ後ニ副峯丸結核ヲ起ス事ハ非常ニ屢々ニシテカ、ル場合ニハ早期ニ副峯丸或ビハ必要ニ應ジテハ峯丸・輸精管モ共ニ摘出ス。(春木抄)

43、肺循環ト「ビヨロステリン」

L. Bugnard.

(Zentralblatt für die gesamte Tuberkuloseforschung,

Bd. 32, H. 9/10.)

血清ノ「ビヨロステリン」量ハ肺循環ニヨツテ〇・一五乃至〇・三三瓦(一立中)減少ス、此減少度ハ「アスフキラキシ」ニヨリテ弱マリ呼吸促進ニヨツテ高マル幼若ナル犬ノ靜脈血漿ハ動脈血漿ヨリモ「ビヨロステリン」量大ナルモ血

清ニ於ケル差ヨリハ小ナリ、之レニ反シテ赤血球ノ「ビヨロステリン」量ハ肺通過ニヨリテ〇・四〇瓦(一立中)増加ス、全血液中ノ量ハ大ナル増減ナシ、故ニ「ビヨロステリン」ハ肺ニ於テ破壊セララル、ニ非ズシテ血漿ヨリ赤血球ニ移行スルモノ、如シ。(春木抄)

質疑應答

問、一、横隔膜神經捻除術ノ術式及ビ注意スベキ點ニ就テ
(大阪、大倉功)

答、患者ヲ半坐位又ハ仰臥位トシ後頸部ニ小サキ枕ヲ插入シテ頭部ヲ後方ニ屈曲セシメ同時ニ顔面ヲ手術側ト反對ノ方向ニ向ハシム、而テ病側頸部ノ胸鎖乳嚙筋ノ後縁ニテ鎖骨ヨリ約二―三横指ノ高サニ於テ局所麻醉ノ下ニ皮膚ニ縱切開又ハ横切開ヲ施ス。縱切開ノ場合ハ胸鎖乳嚙筋ニ平行ニ非ズンテ下方ニ赴クニ從ヒ其ノ停止部位ヨリ稍々遠ザカル様ニ上方カラ下方ニ向ヒテ約三―四樞ノ創ヲ作ル、此ノ場合皮膚ト共ニ潤頸筋ヲモ切斷ス、横切開ノ場合ハ其ノ瘻痕ガ皮膚皺裂ノタメニ目立タザルガ故ニ婦人患者ノ場合ニハ考慮スベキナリ、手術野ニ外頸靜脈現ハレ操作ニ困難ヲ感ズル時ハ之ヲ離斷ス次ニ鉤ヲ以テ胸鎖乳嚙筋ヲ内側ニ牽引シ對側ノ創縁ニモ鉤ヲカケテ外側ニ牽引シ切創ヲ擴大セシムレバ深部ノ筋膜現ハル、之ヲ二本ノ解剖鑷子ニテ舉上シツ、創ヲ入レ剪刀ヲ以テ適宜ノ長サニ上下ノ方向ニ切斷スル時ハ其ノ下ニ脂肪組織及ビ數個ノ淋巴腺現ハル、ヲ以テ之ヲ剪刀ニテ離斷スレバ直チニ前斜角筋ガ手術野ニ出現ス、淋巴腺ノ腫脹アル時ハ之ヲ摘出ス、前斜角筋ナルカ否カ疑ハシキ場合ニハ尙其ノ外側方ヲ剝離シテ見ル時ハ上搏神經叢、更ニ下方ニ中斜角筋ヲ認ム。又切創ノ下縁ニ近ク肩胛舌骨筋ヲ認ム。通常其ノ直下方ハ稍々上部ニ横走スル血管ヲ見ル。即チ横頸動靜脈ナリ、多クノ場合此ノ血管ハ手術ニ對シテ障礙ヲ與フルコトナキモ若シ不便ナル場合ハ之ヲ離斷

スルモ可ナリ。斯クテ露出シタル前斜角筋ノ前面ヲ注意深ク觀察スル時ハ該筋ノ表面ヲ外上方ヨリ内下方ニ向ヒテ走ル直徑約一耗ノ乳白色ノ單獨神經幹ヲ認ム、其ノ末梢ハ胸鎖關節部ニ向ヒテ下降スルヲ見ル、即チ横隔膜神經ナリ。之ハ殆ンド誤ナク簡單ニ發見シ得ベシト雖疑ハシキ時ハ其ノ内側方ヲ觀察スベシ、而ル時ハ通常該神經ノ直グ内側ニ沿フテ細血管ノ之ニ竝走スルヲ見ル、之レ上行頸動脈ナリ、更ニ其ノ内側方ニハ内頸靜脈、總頸動脈ヲ認ム、横隔膜神經ハ此ノ部ニ於テ薄キ前斜角筋筋膜ト輕ク癒著スルガ故ニ注意深ク之ヲ剝離シ純粹ニ神經幹ノミトナス、若シ周圍ノ結締織ヲ混入スル時ハ神經ノ摘出充分ナラズ、斯クシテ孤立サレタル神經幹ニ Thiersch ノ鉗子ヲカケ其ノ中樞ニ近キ部分ヲ切斷シテ能フル限りノ長キ範圍ヲ捻牽引シツ、切除ス。Thiersch ノ鉗子ニ代フルニ、ヨツヘル氏又ハ、ペアン氏止血鉗子ヲ用フルモ可ナリ、此ノ部分ハ殊ニ神經血管ノ輻輳著シキヲ以テ最モ注意ヲ要ス、曾テ Alexander ハ鎖骨下動脈ノ損傷ニヨリテ生命ニ危險ヲ來セル例ヲ報告セリ、危險ナル樁事トシテハ該神經ト交叉スル血管ノ損傷ニシテ血管ニハ横頸動靜脈、鎖骨下動靜脈、内乳動脈等ヲ擧ゲラル、神經ノ抽出終リタル後ハ充分ニ出血ノ有無ヲ確メ、而ル後皮膚縫合ヲ行フ。深部ヨリノ小出血アル時ハ、「ダンボン」ヲ行フ。麻醉ハ局所麻醉ノミニテ足ルト唱フル人多キモ「パントボン、スコポラミン」〇・五ヲ術前三十分ニ注射スル時ハ些ノ苦痛ヲモ伴ハズンテ遂行シ得ラル。本療法ノ適應症。單獨ノ手術トシテ價値ヲ認メラル、ハ、(一)肺臟下葉ノ結核性浸潤、殊ニ其ノ新鮮ナルモノ、及ビ空洞ニシテ肺臟基底部ノ肋膜癒著ノタメニ人工氣胸ヲ行ヒ得ザル場合、(二)、屢々反復スル重篤ノ喀血ニテ肋膜兩葉間ノ癒著アルタメ人工氣胸ヲ行ヒ得ザル場合。(三) Orsos-Fornet ノ理

論カラ本法ニヨリ上葉ニ存スル結核性病竈ニモ良好ナル影響ノ與ヘラル、事
ガ判明シ近時此ノ説ニ讀スルモノ多シ。(Fornet, H. Alexander, Thomson,
Jessen, Oekonomopoulo 等)。兩側肺ニ病竈ノ存スル場合ニモ H. Alexander,
Brunner, 等ハ施術ス、後ニモ述ブル如ク對側ニ滲出性病竈ノ存スル場合ハ
行ハザルヲ可トス。又補助手術トシテノ適應症ハ(一)人工氣胸ノ療期ヲ了リ
テ後尙ホ其ノ肺虚脱ノ状態ヲ繼續セント欲スル場合。(二) Sauerbruch 及ビ
其ノ門下生ニヨリテ唱ヘラル、ガ爾來行ハルベキ胸廓成形術ノ準備トシテ又
所謂健康側ノ肺ノ状態ヲ確メルタメ Plastik ニ先立チテ之ヲ行フ(三) Zadeck
ハ人工氣胸ニ先立チテ之ヲ行フベシトナス、斯クスル事ニヨリ滲出液ノ出現
度ハ減少スルト云フ、何レニシテモ消極的療法ノ效ナキ場合ニ限リテ行フベ
キナリ。禁忌症トシテハ、腎疾患心臟疾患記載セラル、又術後、手術側或ハ
反對側ニ新浸潤ヲ來スコト屢々アルヲ多クノ著者ニヨリテ唱ヘラル、夫故滲
出性ノ病竈ヲ所謂健側ニ發見シタル場合ハ施術セザルヲ安全トス、余モ亦對
側ノ滲出性病竈ガ術後擴大シタル一例ヲ經驗ス、Amandus Wirth ハ六〇〇
例ノ手術患者ニ心臟胃腸症狀ヲ來セシモノ僅ニ、一例ノミ報ズルモ余ノ例デ
ハ比較的多ク一例ハ術後心悸亢進及ビ多少ノ呼吸促進ヲ訴ヘ一例ハ胃部膨滿
感及ビ持續性下痢ヲ訴フ、故ニ腸結核ノ疑ヒノ存スル症例ニハ行ハザルガ可
ナリト思惟ス、又、肋膜面ノ強キ癒著ノタメ厚皮形成ヲナセルモノモ自家ノ
經驗ヨリ效ナシ、本法ノ療法的價值ニ就キテハ幾多議論ノ存スル處ニシテ
獨立ノ手術トシテ價值アリト認ムルモノニハ Thomson, Fornet, Pigger, J.
alexander, Frisch, Fischer 等アリ、他ノ外科的療法主ニ Plastik ノ準備手術
トシテ價值ヲ認メル者ニハ Max. Sauerbruch 等アリ、手術ニヨル成績モ區
區ナルガ夫レハ主トシテ横隔膜神經ノ有スル副枝ニ關係スルモノ、如ク、夫

故 Sauerbruch ノ教室ニテハ Felix ガ捻除ヲ唱ヘ始めリ、Walter Felix ニ
從ヘハ少クモ一二種ハ抽出スベキニテ之ハ肺門上部ニ於テ主幹ト結合スル鎖
骨下神經カラノ副枝ヲモ共ニ抽出シ得ルタメナリト言フ。又横隔膜ノ稍々上
部ニテ主幹ト結合スル doppelte phrenicus ノ存在モ稍々稀ニ認ムルガ故ニ
出來得ル限り長ク捻除スルヲ可トス。(池上直一記)

質疑應答